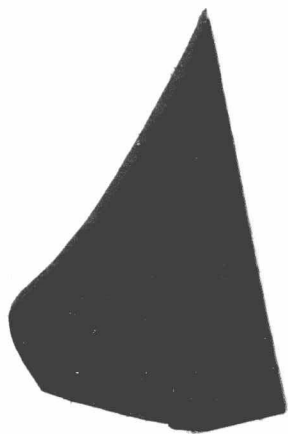
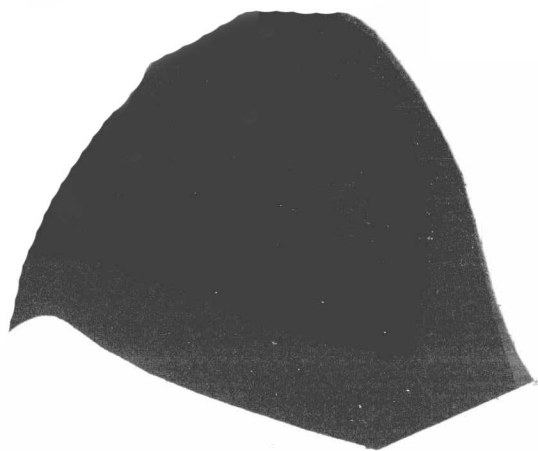


裝

椎名麟三



変装

椎名麟三

新潮社版



変^{へん}
装^{そう}

昭和四十五年九月三十日 印刷
昭和四十五年十月五日 発行

定価 六五〇円

著者 椎^{しい}名^な麟^{りん}三^{ぞう}

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式 会社 新潮 社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(三)三二二三

振替東京 八〇八番

郵便番号 一六二

乱丁・落丁本はお取替えいたしません。

目次

請願書	5
復縁	29
身振狂言	65
善魔	103
両面作戦	137
不安な女	167
変装	193
仮面の下に	221

装帧
萩原英雄

变

装

請
願
書

朝と晩の二回、私は食事をさせてもらうために、その家から二百メートルほどはなれた旅館まで出かけなければならぬ。家というのは、夏の海の客目当の貸別荘で、持主はいうまでもなく、その旅館なのだが、冬のいまは、長期逗留客のために格安でその一間を貸してくれるのである。といってその別荘は、三間しかなく、私がそこへ泊りはじめてから一人の相客もやって来なかった。どうやら人々は、冬は海の傍で過すべきものではないと思っているのかも知れない。だから私は、いわばその別荘を一人で独占しているようなものであり、二食付一泊五百円なら、むしろ朝晩のそのやむを得ない散歩を喜ぶべきであると考えていた。ときどき雨も降り、一回は雪も降った。しかし私は、その雨や雪にさえ不平を感じることなく、きちんとその散歩を欠かさなかった。むろん食べないわけには行かなかったからだが、しかし私が、その散歩を自分の自由な遊びと考えたって、誰に迷惑のかかるはずもないからだ。ときにはその旅館の調理場の一隅で、ときには客間の一室で、ときには帳場の行火あんかにあたりながら、あてがわれた食事をひっそりとすませ

る。旅館の人に、どうも私が正規の泊り客だと思われていない節も見えないこともないが、とにかく魚が新鮮で実にありがたい。むろん私は、ひどく待たされるときもある。帰りは真暗で、陸風がこの辺の作法通りに荒れはじめ。私は、その旅館の裏から出て、松林のなかの道を歩き出したとき、二百メートルほどの道なのに、ひょいと今晩は、あの人のいない別荘へは行きつくことはできないかも知れないという不安に駆られるときもある。そのとき左手の闇のなかの太平洋の白い波頭が、次第に高い壁になって立上り、この陸地へ一挙に襲いかかって来そうな気配を見せはじめ。といって私がそのことにおびえてやる必要のないことはいうまでもない。私は、五、六分後にはちゃんと自分の部屋にたどりついているのだ。

だが、まあ、朝の散歩の方が快適だ。といって私がその旅館へでかけるのは、十時ごろだ。私の泊っている家は、松林の端にぽつんと立っている一軒家なので、その散歩で人に会うのは、あまり多くない。女が、背負籠に茎ごと刈った菜種の花なんかを背負って、その松林のなかを歩いて来たりする。乳牛の飼料にするのだ。冬でも生花の露地栽培ができるほどのあたたかさなので、菜種の花が咲いていても別段不思議ではない。私たちは、細い道ですれちがう。向うも声をかけなければ、私もお早うともいわない。私は、彼女の黒い、銅像のような表情のない顔から、潮のにおいがしたと思う。彼女は、夫を海で失って、五人もの小さい子供を乳牛を飼いながら育てているのだらうと空想したりする。この土地では私は異邦人であり、異邦人らしい権利を行使するわけだ。一步、彼女の行先に見える漁村へ入れば、現実というあれやこれやのむつかしい関係の糸が彼女をとりまいており、そのくもの巣にひっかかつては、私の折角の空想も無残な最期をとげるにちがいないのである。全く異邦人である方が気がいい。

食事をすましての帰途などに、この海も眺めてやる。砂浜のあるのは、この松林のあるあたりだけで、——しかしこの松林は、一本一本がおそろしく貧弱なのだ——、眺め得る海岸線のほとんどが岩浜なのだ。ときにはバス代をはり込んで、そのあたりまで出かけて見る。波に浸蝕された種々さまざまな形をした岩が、遠く岬までのびている。またとんでもない沖の方で、海が高いしぶきをあげていたりする。そこには岩がつき出ているのだ。この海と岩の組合せには、何か私を引きつけるものがある。だが、結局のところ、別に何ということもない。私は、自分の宿へすぐ引返して来る。私がここへ来たのは、病んでいる心臓に危険な冬を過ぎさせてやるためだが、しかし療養専一につとめるといふわけには行かないからだ。私は、文筆業者だが、いつも働いていなければ食えないという情けない文筆業者だからである。

そのとき二人の若い男が、私の宿の入口に立っていた。私は、一瞬ためらった。渡り者の押売り屋といった感じがしたからだ。しかしどちらも安物の褐色とも灰色ともつかないジャンパー姿で、オーバーを着ていないところを見ると土地の男かも知れなかったが、漁師でないことも明らかであった。

『ヤクザがかつてゐるな』と私は思った。

しかもわるいことには、その家は海風を真正面から受けるのを避けて、松林と畑を劃する土手の下に建っており、あたりは一面の菊の畑で、土手ぞいの三十メートルほどの細い道しかその家に行く道はないのだ。私の足は自然にのろくなっていた。たしかに二人は、そのヒイラギの生垣にかこまれた家へ私の入って行くのを妨害するようにその道に立ちふさがっているのだ。一人は、ヒイラギの葉のとげのところを、親指と人差指との間に支えもって、息をふきかけては風車のよ

うに廻っていた。一人は、タバコをふかしながら、ここからはかなりはなれている村の家並みの方へ眼をやっていた。彼等は、私の方を見ないふりをしていたが、しかし私の歩いて来るのをちゃんと知っていることは私にもわかつていた。しかし私は、勇気のある方ではない。だが、私の身体は、彼等の方へ近付いて行つた。その方向へ歩いている以上、それはやむを得ないことだ。私の足は、彼等の傍を通るとき、一足だけ畑のなかへ踏み込んでいた。むろん彼等と衝突するのを防ぐためにだ。ヒイラギの垣根を通り抜け、勝手口の戸へ鍵をさし込んでまわしているとき、二人の若い男の所在なさそうに帰って行く姿が生垣越しに見えた。結局何事もなかったのだなと私は考えた。

私は、旅館から借りてある石油ストーブに火をつけ（断わっておくがこの燃料代は宿泊費のなかにはふくまれない）、薬罐をかけた。恐らく去年の夏、この別荘を借りた人の置いて行つたものらしく、その底に大きなくぼみが出来ている。だが、湯をわかすのには、十分である。茶ダンスには、茶道具も一式そろっているが、茶碗は一つしかないのに、箸だけがやたらとある。種類はそろっていないが、何十人分もあることはたしかだ。湯は、十五分ほどかかってわいた。帰つたとき、六度を示していた寒暖計も、やっと八度近くになっている。だが、西日がこの部屋に射し込みはじめると、この六畳の部屋の温度も十五度ぐらいにはなるのだ。突然、玄関の戸をたたく音がして、男の声が聞えた。その声は、いかにも大儀そうに、

「今日は……今日は……」

と繰り返しているのだ。私は、すぐにあの二人が引返して来たのだとわかった。私は、もうなんのためらいもなかった。私は、急いで玄関へ行つた。自分でも理解しがたいことであるが、

喜んでさえたようである。とにかくその男たちは、私が去年の暮この宿へ来て以来のはじめての訪問客であつただけは事実だつた。私は、玄関の土間へ降り、私がこの宿へ入ったとき以来しめたきりになつていたドアの鍵をあけた。しかしそこには男たちの姿は見えなかつた。けげんに思つてたしかめると、男たち二人は、私がドアからとび出して来て噛みつきはしないかとでも恐れるように、そこから五メートルもある生垣のあたりまで後退して、そこで兄弟であるかのように肩を寄せあつていた。

「何か用ですか？」と私は声をかけた。

二人は、小声で二言ばかりささやき合つた。おたがいに私をぬすみ見るようにしながらである。しかし二人の間にすぐに結論が出たようだつた。二人は肩をならべてのろろ私の方へやって来た。その二人は同じようになつてれたような微笑をうかべていた。私は、かすかな驚きを感じた。大人のかたい仮面をカチンと破つて少年の微笑がのぞき出したという感じがしたからだ。その男たちは、たしかにまだ二十歳前の少年たちであつたのである。

「その田浦村のもんですけど」と一人がいった、「入つてもよろしいですか？」

「ああ」と私は不得要領な声を出した。

しかし私の考えていたことは平凡なことである。このごろの少年たちは、身体も大きくませていて、何やら知らないが得体の知れないところがあるということであつた。すると少年の一人がこの家の案内でも知つているように私へたずねていたのである。

「どの部屋ですか？」

「突きあたりの西の部屋です」と私は答えた。

やがて二人の姿は廊下へ消え、土間に汚れたサンダルが二足残っていた。これでは靴下も埃だらけだろうと思い、廊下に点々と残っている足跡が見える気がした。三日に一度は、旅館の女中が掃除に来てくれるのであるが、しかし彼等の帰った後は、拭くぐらいのことをしておかねばならないだろうと思った。だが、部屋へ入った私は、彼等はこの寒いのに素足であることを発見したのだ。きちんと一応礼儀正しく畳の上に正坐している二人の足のうらが、部屋へ入った私の眼へ最初にうつったのだ。それは大した足のうらではなかった。しかし身体の重さをのせて窮屈そうに歪んでいるそれは、血行をとめられてところどころ蒼白くはなっていたが、それ以外は鮮やかな血の色を染め出して、私は彼等の若さをまたもや感じなければならなかったのである。私は、机の前へ坐りながらいった。

「どうか足を崩して下さい」

彼等は、おたがいに眼で相手に膝を崩すことをすすめ合った。それからめいめいで、あぐらをかいた。私は、繰り返した。

「何の用事なんですか？」

二人は、またもや眼で合図し合った。一人は、うつむいてのびた油気のない髪へ手をやった。すると他の一人は、いかにも不安定そうに片手を後ろへついて身体を倒すようにした。前かがみになった少年は、それで覚悟がきまったというふうに眼を伏せるようにしていった（どうやら彼が代弁人といった感じだった）。

「請願書を書いてもらいに来たんです」

「セイガンシヨ？」

「娘をくれという請願書です。幸兵衛さんとこの娘です」

「幸兵衛？」

「屋号なんです。この辺では屋号で呼ぶんで、杉田理髪店です、ほんととはな。この坂野は（と見もしないで身体を倒している少年をさした）、酒屋の次男坊ですが、その杉田理髪店の恵ちゃんって子、嫁にもraitたいといったら、その杉田のおやじが、請願書を出せというんです。ところが坂野の家の者も、近所の者も、請願書なんか書いたこともないし、書き方もわからないというんで、お願いに来たんです」と彼はやっとふかい息をつぎながら、坂野と呼ぶらしい少年へいった、「そうだっぺ？」

私は、何のことかはっきりわからなかった。娘をもらうために娘の親へ請願書を出すというような話は、聞いたこともなければ、考えられもしなかった。おそらく少年たちは、何かを聞きまちがえたか、思いちがいしているにちがいないと私は考えた。とにかく彼等が、私の商売を代書業と思いがえているらしいことだけはたしかだった。

「請願書を出すという意味がぼくにはよくわからないんだが」と私はいった、「この辺にはそんな習慣があるんですか？」

「さあ」と代弁人はあいまいに答えた。

「おそらく請願書というんじゃないと思うな」

「請願書です」と彼は断乎として答えた。

「じゃ、その字はどんな字を書くんです」

代弁人は、たちまち困惑をあらわした。彼は救いを求めるように坂野少年を見た。坂野少年は、

相変らず身体を倒すようにしたまま、退屈そうに眼をとじている。代弁人の少年は、仕方なさそうに坂野少年へ身を寄せてささやいた。

『請願書って、どういう字だっべ？』

坂野少年は、ジャンパーのポケットから、タバコの箱やらマッチやら紐の束やらをとり出した。最後に小さくたたんだ紙片が出て来た。坂野少年は、その紙片をひらくと、ぎごちない手付きで私へ差し出した。その薬包紙のような小さな紙片には、弱々しいペンの字で明らかに「請願書」と書いてあった。

『誰の字ですか？』と私はたずねた。

坂野少年は、妙にかすれている声で答えた。

『恵ちゃんが教えてくれたんです』

間もなく少年たちは、来たときとは打って変ったように意気揚々と引上げて行った。代書料をとらなかったことが彼等の気をよくしたのかも知れなかった。私は、机の上に残った原稿の反古を見た。それには請願書を書くために彼等から聞いたメモが記してあった。昭和十九年五月二十日生れ、十八歳、坂野次郎という名や、相手の娘の杉田恵子、父親の杉田勝一という名などである。やがて私は、その反古を引裂いてまるめ、紙屑籠へ投げ入れた。何だか馬鹿馬鹿しい気がしたからである。

『要するに、あの二人はまだ子供なのだ』と私は心に呟いた、『何かとまちがっているにちがいないんだ。ひよっとすると、坂野少年は、素行でもあまりかんばしくないで、誓約書か誓願書でも書けといわれたのにちがいないんだ』